

ウェーバー行為論の物語論的転回に向けて

——ミルズとシュッツからの発展——

Toward the Narratological Turn of Weberian Action Theory: A Theoretical Development from Mills and Schutz

加藤 隆雄

Takao KATO

要旨

主観的に思念された意味によって行為を定義したウェーバーの行為論は、あたかもパーソンズの社会システム論や相互作用論、現象学的社会学などへとそれぞれ継承され、その独自性はこれらの学派的行為論へと吸収されたように見える。しかし、ウェーバーが、行為は意味と理解をもって成立しているとした肝腎の点は、その後の社会学では修正され批判されてきたのである。とはいえ、ウェーバー行為論の主観的に思念された意味の客観的性格に対しては、ミルズの動機の語彙論によってその共有知識としての性格が示され、同時に範例的ストックという観点が開かれた。そして、そこからは連辞的ストックの可能性も導き出され、両者を保持するものとして物語というモデルも示される。物語論は、行為の動機の抽象的な構造の分析を可能にしてくれる可能性を有するのであり、本稿は、これら物語論の成果を、行為論に結びつけて論じるための予備作業となることを目的とした。

キーワード：ウェーバー、社会的行為、動機の語彙、物語論

はじめに

社会学的行為論はマックス・ウェーバー¹⁾をもって始まる。ウェーバーは自らの歴史社会学的研究の方法論として、「社会的行為」の概念を置いた。それが行為者の「思念された意味」、主観的解釈を原理としていることから、「方法論的個人主義」と呼ばれていることはよく知られている。

しかし、ウェーバーのこの行為論は、そのオリジナルな形においては、ある意味で余人の追従を許さず、その後の社会学において、さまざまな「社会的」改良を加えながら継承された。『社会的行為の構造』で自らの主意主義的行為理論にウェーバー行為論を組み込んだパーソンズ、ウェーバー行為論をミードの相互行為論の中に解消した相互作用論、『社会的世界の意味構成』でウェーバー行為論を検討して組み替え現象学の枠組に収めたシュッツなど²⁾、いずれもウェーバー行為論

の主眼である主観的意味解釈のプログラムを、あまりに危険な企てとみなすがごとく、客観主義的なまたは相互主観的・間主観的な枠組へと救出しようとしている。

しかし、ウェーバーは、行為の動機を心理学的な素材として扱わずにすむように、〈主観的解釈の客観性〉を確保しようとして自らの行為論を彫琢したのである。したがって、パーソンズのように、むしろいくつかの心理学のスタンスを行為理論に取り込んでしまうやり方は、むしろウェーバーの方法論とは正反対である（第1節）。むしろ、ウェーバーの後継者とはみなされることはほとんどないミルズの研究の方が、ウェーバーの〈主観的解釈の客観性〉の正統的継承・発展であるように思われる。ここにおいて、ウェーバー行為論は、他の枠組に接収されることなく、その〈主観的解釈の客観性〉に沿いながら展開されることができ（第2節）。その際、ウェーバー行為論の最も体系的な批判検討であるシュッツの議論をふまえておくことが必要になろう。シュッツの『社会的世界の意味構成』は、現象学的視点をもってウェーバーを隅々まで精査するも、現象学的社会学としては完成する途上にある著作である。先に述べたように、ウェーバー行為論はそれぞれの学派の理論体系の中に埋もれてしまっていることが往々にしてある。そのために、〈主観的解釈の客観性〉がどのような性質のものかを見極めることができない。シュッツの著作は、現象学へと吸収される前のウェーバー行為論の特徴と限界とを提示してくれるのである（第3節）。ウェーバー行為論に対するミルズとシュッツによる修正と批判から、〈主観的解釈の客観性〉を保持しようとするウェーバー行為論の問題点と限界が改めて明らかになる。ミルズとシュッツの批判・修正が指し示すのは、シュッツが推し進めた現象学の方角であるとは必ずしも言えない。主観的に思念された意味が、「意味」である限り、それは言語の理論や意味の理論を指向している。本稿は、ウェーバー行為論を物語論の枠組に据え直すことで、ウェーバー行為論が〈主観的解釈の客観性〉という性格を失わずに、新たなパースペクティヴを得られることを示す（第4節）。

1. ウェーバーの行為論

ウェーバーが構想した著作体系の一つである『経済と社会』巻頭の位置を指定され、ウェーバー社会学の定礎となる役割を担われた『社会学の基礎概念』において、ウェーバーは自らの社会学の原子概念として「社会的行為」を措いている。このことは、次のように述べられている。

「社会学」という言葉は、……社会的行為を解釈によって理解するという方法で社会的行為の過程および結果を因果的に説明しようとする科学を指す。そして、「行為」とは、単数或いは複数の行為者が主観的な意味を含ませている限りの人間行動を指し、活動が外的であろうと、内的であろうと、放置であろうと、我慢であろうと、それは問うところではない。しかし、「社会的」行為という場合は、単数或いは複数の行為者の考えている意味が他の人々の行動と関係を持ち、その過程がこれに左右されるような行為を指す。(Weber, 1922: 邦訳 8)

ウェーバーが社会学を「社会的行為を解釈によって理解するという方法で社会的行為の過程および結果を因果的に説明する科学 [学問 (Wissenschaft)]」を定義していることは、ドイツにおけるディルタイやリッケルト、ヴァンデルバントらの思想的伝統の背景³⁾をもつとしても、ウェーバーの行為論は、この「解釈によって理解する」という、あたかも主観主義ともとれるような方法論を

一つの特徴とする。そして、ウェーバーが定義する行為（Handeln）もまた「主観的な意味」、訳によっては「思念された意味」⁴⁾によって定義される。

このようにウェーバー行為論においては、主観の意味が、行動を社会的行為として構成し、当該の行動をした者を行為者として構成する。行動する者は、自らの行動に何らかの主観の意味を与え、その思念された意味によって行動の方向性が参与者に露わになり、時間的経過のなかで行為としての行動の継起が生じるのである。

ウェーバーがこのような主観主義にも見える立場を採ったのは、歴史的な行為であれ現在進行している行為であれ、それを「理解」しその経過と結果とを因果的に説明するためであった。

「理解」とは、次のような意味や意味連関の解釈による把握である。(一) 或る具体的なケースにおいて実際に考えられている意味や意味連関（歴史的研究）、(二) 平均的近似的に考えられている意味や意味連関（社会学的大量観察）、(三) 或る頻度の高い現象の純粹類型（理想型 [理念型]）として科学的に構成される理想型的な意味や意味連関。（同上 16）

こうした観点に立ちながら、ウェーバーは行為の動機に対しても、主観と意味に基づく大胆な定義を施す。

「動機」とは、行為者自身や観察者が或る行動の当然の理由と考えるような意味連関を指す。「意味適合的」とは、行動の諸部分の関係が、思考や感情の平均的習慣から見て、典型的な（ふつうは、「正しい」という）意味連関と認められる程度の連関性ある過程を辿る行動のことを指す。これに対して、「因果適合的」とは、経験的規則から見て、いつも実際に同じような経過を辿る可能性が存在するという程度の諸過程の前後関係のことを指す。（同上 20）

同時代のデュルケムが、社会的事象を「物のように」捉えるという客観主義的スローガンを経済学の方法に据えたことと比べてみるならば、ウェーバーが自らの社会学の基本概念をこのような主観と意味と解釈によって定義しようとしたことは、その本来の意図を捉えない限り、なかったことになってしまいたい誘惑にかられる類のものなのかもしれない。

こうした方法論は、特に動機という内面的で主観的だと思われるものを、行為者の内面に「感情移入」したり、心を読んだりするという手段で「理解」することを奨励するものでは、もちろんない。むしろ、動機や内面的なものが、行為者自身、他者、観察者といった参与者に共有されているという前提に立つものだった。この点で、ウェーバーは動機に心理学的手法を密輸することなく、〈主観的解釈の客観性〉とでも言うべきものを自らの社会学の柱としたのだった。

これが危険な企てだと後の社会学者たちが考えたということは前述した。特に3節で取り上げるシュッツは、自らの現象学的立場を推進する趣旨もあつてか、ウェーバーの議論を間主観的な次元へと全面的に位相転換しようとした。ただ、それではウェーバーの〈主観的解釈の客観性〉もまた解体されてしまうおそれがあった。

以上のような主観主義に見える立場に比べると、次のような社会的行為の分類は随分安心できるものに映るだろう。

すべての行為と同じように、社会的行為も、次の四つの種類に区別することが出来る。(一) 目

的合理的。これは、外界の事物の行動および他の人間の行動について或る予想〔期待〕を持ち、この予想を、結果として合理的に追求され考慮される自分の目的のために条件や手段として利用するような行為である。——（二）価値合理的行為。これは、或る行動の独自の絶対的価値——倫理的、美的、宗教的、その他の——そのものへの、結果を度外視した、意識的信仰による行為である。——（三）感情的、特にエモーショナルな行為。これは直接の感情や気分による行為である。——（四）伝統的行為。身に着いた習慣による行為である。（同上 39）

社会学者の中には、これよりも前の一種忌まわしい主観主義を飛び越して、ここからウェーバーの行為論を読み始める者も多いのであろう。ウェーバー社会学をアメリカ社会学に導入した立役者とでも言うべきパーソンズにその代表的な事例を見て取ることができよう。パーソンズの『社会的行為の構造』（Parsons, 1937）は、マーシャル、パレート、デュルケム、ウェーバーらの古典的な行為・動機理論を「主意主義的行為理論」として、概念的な統合を行った著作である。ここでは、「時間的な実在の過程と考えられる動機」としての動機の理念型を練り上げることに著述の大半が費やされるのであるが、パーソンズは、主観的意味と解釈を介在させるというウェーバーの意図をあえて無視して、実体論的な動因の説明をもちこんでしまった。社会的行為は動機づけのエネルギーが目標達成に向って展開される消費過程であるとし、動機を心理学的諸概念によって説明するという、ウェーバーが注意深く避けてきた道へとためらいもなく進んでしまった。行為の参与者によって「…と解釈される」ものを、研究者によって「…によって動かされている」という次元に説明をずらししてしまうのである。ここに生物学的なシステム理論に影響されたパーソンズの立場を見ることができるとしても、またそのような説明こそをパーソンズが標榜していたとしても、少なくともウェーバー行為論をパーソンズが継承したとは言えない理由がここにある。また、次節でみるミルズがアメリカ産の哲学であるプラグマティズムに影響を受けていたこと、パーソンズがアメリカ的な思想にほとんど依拠せずに自らの社会学体系を打ち立てたことを考えると、ウェーバー行為論はプラグマティズムの土壌において受け入れられたと考えてもいいのかもしれない。

2. ミルズの動機の語彙

『パワー・エリート』や『ホワイト・カラー』などにおけるアメリカ社会や近代産業社会の分析者であり、『社会学的想像力』における批判社会学者としての華々しい活躍の影に隠れがちであるが、チャールズ・ライト・ミルズの研究キャリアの原点はマックス・ウェーバーの研究であった。アメリカン・ラディカルズとしての他の著作があまりに際立ちすぎているためにウェーバー研究者として認知されることはほとんどないが、ミルズはウェーバーの官僚制の理論をもとに『パワー・エリート』などの著作を書いたのみならず、ウェーバー行為論にも修正を加えようとしていた⁵⁾。

ミルズは、ウィスコンシン大学のハンス・H・ガースの指導のもとで、1942年に博士の学位を取得している（ガースは後述の通り、アメリカにおけるウェーバー研究者の一人である）。博士論文は、死後公刊された『社会学とプラグマティズム』（Mills, 1964）であるが、この中では、大学組織と教育においてプラグマティズムの学派はどのような地位を占めていたかが例証されるものの、タイトルから期待されるようなプラグマティズムの社会学への貢献について踏み込んだ検討はない。また、パース、ジェームズ、デューイの検討がそれぞれ1章を費やしてなされている一方で、ミード

は章を割り当てられず、その理論への考察もまとまってなされていない。ウェーバーへの言及も散見されるが、それは行為理論についてのものではない。

ウェーバーへの関心を示すものとして、ミルズは1946年に師匠のガースとの共著という形で、ウェーバーの著作を編纂した *From Max Weber: Essays in Sociology* において序文を書いている (Gerth and Mills, 1946)。ただここでも、執筆の中心はガースでありミルズはウェーバー研究を始めたばかりであったことが、ガース本人が語ったと記者が述べている (Gerth and Mills, 1946: 訳書 226-7「再版によせて」)。そして、実際、ミルズがウェーバー行為論について叙述したと思われる部分は含まれていない。

以上のような時系列情報にもかかわらず、ミルズがガースのもとでウェーバー研究を始める前にすでにウェーバーの、それも行為論に関して深い関心を有していたことを示すのが「状況化された行為と動機の語彙」という論文である。これは、発表年としては博士論文よりも早い1940年に *American Journal of Sociology* に掲載され、後にホロヴィッツが編んだ『権力・政治・民衆』(Mills, 1963) に収められた。

この論文の主題は、動機の帰属という問題であるが、先に見たウェーバー行為論をふまえるならば、まさに行為の主観的に思念された意味の問題であることがわかる。とはいえ、ここでのミルズは、最初から問題の核心が言語的なものであることを述べている。

言語研究の底流をなしている前提は、われわれが言語行動にアプローチするばあいに、それを諸個人の個人的な状態に帰属させるのではなく、いろいろに分化した行為を統一あるものに整合するというその社会的機能を観察するよう留意しなければならないという平明な前提である。言語が他者によってうけとめられるのは、それが前もって個人に内在している何ものかを表現するからというよりもむしろ、将来の行為を指示するからなのである。(Mills, 1963: 訳書 344)

ここではまず、動機を行為者の個人的状態、つまり内面へ帰属させるようなアプローチが退けられる。ウェーバー行為論への批判から行為者の内面を、理念的型であるにせよ動機を帰属させるパーソンズが定式化したような動機と行為の捉え方が否定されるのである。

言語の「社会的機能」(これはまったく非パーソンズのな語法である)が、行為者の内面の状態を表現することにあるのではなく、将来の状態を指示するものであるというのは、その言語表現によって、行為にかかわる自己と他者が、行為の動機と意味とを了解しあい、それによって当該の行為が間主観的に成立することを意味している。「動機は、個人の「内部に」固着した要素ではなく、社会的行為者によるその行動の解釈をおしすすめる条件なのである。」(同上 345) この点でも、動機を行為者の内在的なエネルギーとして、表出された行動を行為と捉えるパーソンズの客観主義とはっきり異なる。言語の機能を、内面の表出や翻訳として捉えるのではなく、それによってある状態に向わせるものとして捉える発想は、パースのプラグマティズムのものである。そしてこれは、パーソンズが『社会的行為の構造』での理論構築の際に採用しなかったアメリカ的な思想であった。

では、行為における動機が言語であるとはいったいどういうことであるのか。

動機というものは、ひとつの限られた社会的状況のなかで、さまざまな事実を推定させる機能をもつ象徴的な語彙であると考えられることもできよう。行為者としての人間は、言語のやりとりを通じて、動機を自己と他者に帰属させる。(同上 345)

例えば、(日本語の)色の語彙として、「赤」「青」「黄」「緑」、あるいは「臙脂」「群青色」「山吹色」「若竹色」などがあるのと同様、ある行動に関して、「自分の利益になると思った」「人間として当然のこと」「ストレスの発散」「そうすることが習慣になっている」など、行動の動機を説明するストックが存在する。ミルズは「動機とは合言葉である」(同上 346)と言う。自己と他者は、当該の行動にこのようなストックの中から一つを取り出し、当該の行動を、例えば、それを行った人のもつ価値に合理的な「行為」として認定する。ストックから互いに異なる語彙を取り出してしまった場合には、相互交渉によりその語彙を一致させるように努めるか、あるいは違う行為として認定したまま相互作用を終えてしまう。他者がいない場合でも、ある行動は、それを行った本人によって語彙の割り当て(動機帰属)をされる(今自分がした行動は自分の無意識的な願望の表れだ、というように)。ミルズは、デューイを引きながら動機とは「大義名分」であるとも述べている。これが、動機が内面的なものの発動ではなく、動機の語彙による解釈だということの意味である。ミルズは、このような発想をケネス・バークから得ていると述べている(同上 346注)。

こうしてウェーバーにおいて、行為の動機が主観的に思念された意味である、ということの客観的な性格が明らかになった。

マックス・ウェーバーは、動機とは意味の複合体であると、規定する。意味の複合体とは、行為者もしくは観察者にとって、その行為のために適切な根拠として映るものである。このような見解によってとらえられる動機の側面は、その本質的に社会的な性格である。(同上 347)

明らかに動機の語彙は恒常的なものではない。特定の時代の社会や文化、あるいは政治や経済との関係において、そのストックの内容は変化すると推測できる。ミルズは、ここからどのような社会的な状況が、どのような動機の語彙を生み出し語彙として定着させていくか(制度化)の考察に移っていく。そして、「状況に規定された動機の布置(constellation)」(同上 351)を明らかにするためのプログラムの構想と、現代アメリカ社会において、フロイト的無意識にかかわる語彙、個人主義的な、あるいは快樂主義的な語彙の優勢を指摘している⁶⁾。

ミルズは、行為がこのように動機という言語的な範疇によって成り立っていることを示して、その語彙の布置を調べる経験的な研究へと導かれていくのだが、しかし、言語学的な観点からは、動機は語彙であると指摘して事足りるとするのは、あまりに早計であったとも思われる。第一に、ミルズは、動機が言語であるということを、文字通りの意味で言ったのか、それとも比喩として述べたのか、自身でも明確でなかったように思われる。後者であるならば、動機の語彙は、言語における語彙のようなものと述べることに等しいのだが、ミルズは至るところで動機は人を納得させる言語であると述べている。それゆえ、言語としての動機は比喩ではなかったはずであり、したがって語彙の布置についてより言語学的な議論が可能だったのではないだろうか。フェルディナン・ド・ソシュール⁷⁾に始まる言語学の伝統は、語彙を範例(paradigm)と捉え、アンドレ・グレマスは意味論的な差異を構造化する方法を開発した(Greimas, 1966)。ウェーバー～ミルズの行為論は、したがって、こうした言語学的な方向での発展の可能性をもっていることになる⁸⁾。

この第一の点をふまえるならば、言語としての動機は、言語として、連辞的關係を有しているはずである。つまり、ある動機は単独で現れるのではなく、別の要素との連続のもと、現れたり現れなかったりするということを示さないといけないうだろう。つまり、行為の時間的連鎖の観点から欠けていたのである。

ある行動に動機の語彙ストックの中から動機が帰属されて行為として認定されるとしても、そこには時間的に先行する要素からの言語的連続が存在する。ミルズが取り上げた20世紀のアメリカ社会においても、ある人の行動が、即座に快樂主義的な動機として解釈されるわけではないのである。

ミルズは、1953年にガースとの共著である『性格と社会構造』(Gerth and Mills, 1953)において、動機の語彙について再説している(邦訳では「動機の語彙」は「動機用語」と訳されている)。しかし、ガースの意向が反映したのか、動機の語彙は「第二部 性格構造」のなかに位置づけられ、「ほんとうの動機」の自覚が論じられるというちぐはぐな内容になっている。動機の語彙の布置が、役割体系との関連していることについて言及がある点で、理論的發展の糸口だけはあるものの、一般的に後退した感は否めない(西川, 1991)。

3. シュッツにおける行為の時間の問題

フッサールの薫陶のもと、アルフレッド・シュッツが、現象学を社会学へと接合するにあたり、詳細に検討したのがウェーバーである。ウェーバーとシュッツには、19世紀末以降のドイツ思想的伝統が共有されており、シュッツがその最初の著作『社会的世界の構成』(Schütz, 1932=1960)において、次のように述べるのもウェーバーと現象学とのつながりが示されているようで興味深い。

社会的全体は、個人の存在に先行し、したがって個人は全体の一部であるから存在するだけなのか、それとも反対に私たちが社会的全体と呼んでいるものとその部分的組織は、その存在だけが現実にふさわしい個々の人間個人の総合であるのか。人間の意識を規定するのは人間の社会的存在であるのか、反対に人間の社会的存在を規定するのは、人間の意識であるのか。(同上：訳書15)

こうしてシュッツが「客観的精神の世界を個々の行為に還元するという原理」を徹底したとしてウェーバーを高く評価し、自らの議論の出発点としたのは故あることであった。

『社会的世界の構成』は、第1章「予備的考察」においてウェーバー批判の概要が示され、第2章と第3章でフッサールの現象学的な視座が解説される。ウェーバーの行為論が孕む限界を指摘し現象学的に展開し直すため、第2章では行為と、特に「意味」をめぐる議論が、第3章では他者理解をめぐる議論が取り上げられている。そして、第4章が現象学を直接ウェーバー行為論に対決させる部分であり、第5章はその総括である。

本稿の目的は、シュッツのウェーバー批判の全容をたどり直すことではなく、ウェーバーからミルズに引き継がれた点(刊行の時系列としてはシュッツの方がミルズの論文よりも先であるが)をさらに先に延ばすことなので、まずシュッツによるウェーバー批判の概要を以下に示す。

ウェーバーは経過としての行為と既に完了した行為、産出活動の意味と産出物の意味、自己の行為と他者の行為あるいは自己体験と他者体験、自己理解と他者理解を区別していない。彼は、行為者がいかに意味を構成するかについて問題にしていないうし、またいかに意味が社会的世界にお

ける参与者や局外の観察者によって修正変更されるものであるかについても問題にしていない。また「他者理解」現象の正確な把握にとって、自己心理的なものと他者心理的なものとの固有の根本連関を明らかにすることは不可欠であるのに、これも問題にしていない。(同上：訳書 19)

このようにシュッツのウェーバー批判は、相当に根底的で複雑に根を広げているように見える。多岐にわたる論点をすべてにわたって追うことは困難だが、ここではシュッツの批判が収斂している点として、三つの点を取り上げることができるように思われる。第一に行為の時間性の問題、第二に思念された意味の自己と他者での同一性にかかわる問題、第三に意味の社会的構成の問題。

この中で、自己・他者・観察者にとっての意味の同一性がいかに担保されるのかという問題について、シュッツはかなりの紙幅を費やして論じている。しかしながら、ここで問題にするのは参与者に思念される意味内容ではなく、ミルズが言うように、そのような動機を付与されることが参与者にどのような「将来の行為を指示する」か、ということであった。シュッツは、他者理解の問題に間接呈示のような概念をもって取り組んでいるが、パーソンズとはまた別の形で、心理学的な迷路に入り込んでしまっているようにも思われる。

第三の、意味の社会的構成の問題は、後のシュッツにおける現象学的社会学の根幹をなす議論であり (Schütz, 1962)、ミルズの動機の語彙論においても該当する論点であろう。ある語彙は、どのようにして動機の語彙としての資格を得ることができるのか。カミュ『異邦人』で、主人公のムルソーが自身の裁判で語った「太陽がまぶしかった」は、殺人の動機の語彙として認められうるのかどうか(あるいはそもそも動機として述べられたのか)。この点は、第4節で取り上げることにする。

そこでここでは、シュッツによるウェーバー批判の第一の論点である行為の時間性の問題について検討してみたい。

先の引用でも示した通り、シュッツにおいて完了し既成の結果となった行為成果 (Handlung; actum) と、産出過程にあり経過としての行為 (Handeln; actio) とは区別されるべきものである。前者はすでに定まったものとして参与者の前にあるのに対して、後者は参与者にとってまだ定義づけもなされていない「持続」である (同上 66-67)。「過去把持の形式においてのみ、もしくは回顧的な想起の形式においてのみ、私たちは流れ去ってしまったものについて直接的に意識するのである」というフッサールの言葉を引きながら、行為の動機を、行為成果に対して与える「理由動機」と、未来完了時制に行為を先取りしながら遂行中の行為に与える「目的動機」とに区別するのである (同上 130)。こうした観点からすれば、ウェーバーにおける社会的行為は、凍結した瞬間を切り取ったものに過ぎない。

しかし、シュッツのこの徹底した検討にもかかわらず、本稿の観点からはより持続的な時間については検討されていないように思われる。一連の行為 (正確には未来完了時制において行為となる一連の行動) において、どこからが過去になるのであろうか。目下の現在というものがあるとしても、行為はその継続の時間を必要とするために、行為における過去と現在の区別は一義的に可能でないばかりか、そのような過去と現在の分節のしかたによって行為の定義が変わってしまうこともある。たとえ現在進行している行為であっても、それは先行する行為連鎖の続きとしてなされている場合もあれば、過去の構成物の行為であっても依然として語彙の割り当てができない行為もある。どこまでを行為として扱うのかというこの時間分節の問題は、行為の語彙割り当てにおいて決定的な役割を果たす。シュッツがウェーバー行為論批判として持ち出してきた時間性の視点は、重要な視点ではあったが、その扱いは現象学的な観点の制約を受けた不徹底なものであったと言えるの

ではないだろうか。

4. 行為論から物語論へ

シュッツによる指摘の第三の点として挙げた、動機の意味が社会的に構成されるという問題は、動機の語彙が社会的ストックであることに対応している。ウェーバーの行為論は、動機が社会的構成物であることをふまえるに至っていなかった。それがミルズの動機の語彙論として発展をみたわけであるが、シュッツもまた知識のストックとして動機を見ていたことになる。

このような共有知識のストックの存在を認めるとすれば、同様のものとして、言語の連辞的・範例的ストックとして考えられたソシユールのラングもまた認めることになる。ミルズは動機が言語だと述べた。しかし、範例的なストックは取り上げたものの、言語のもう一つの関係としての連辞的なストックについては述べていなかった。シュッツは、並列的ではない動機の時間性に気づいてはいたが、時間分節を含む連続性・連鎖性については考察を加えなかった。これは、ウェーバー行為論は、範列性 (paradigm) の次元と、行為=解釈のつながりという連辞性 (syntagm) の次元に展開が可能であったということの意味している。

では、動機における連辞性・連鎖性というのは何を意味するのか。井上俊は、ミルズの動機の語彙論とそれを継承した「モーティヴ・トーク」論 (注 (6) 参照) を検討するなかで、動機の語彙への割り当てを「物語」として捉えることを提唱している。どうして物語なのか。

現実あるいは架空の出来事や事態を時間的順序および因果関係に従って、しかし基本的には因果関係を中心として (あるいは R・バルト流にいうなら、継起性と因果性とを組織的に混同することによって) 一定のまとまりをもって叙述したものを「物語」と呼ぶなら、ある出来事や事態を構成する行為をその「当然の理由」と考えられる「動機」——シュッツのいう「理由動機」であれ「目的動機」であれ——に関連づけて叙述するモーティヴ・トークは明らかにひとつの「物語」である。(井上, 1997: 31)

井上は、記述されたエピソードや事件の記事における動機の語り (モーティヴ・トーク) を物語として分析している。

これまで述べてきたように本稿は、物語が言語的性格、すなわち、範列性と連辞性を有していると捉える。物語が、もともと書かれたテキストを指すのではなく、「物-語り」であり“narrative”であることを思い出すならば、物語とは継起する出来事を整序し組織化する (あるいは「R・バルト流に」とあるように、継起を因果の順番に意図的に置き換えるなどする) システムであることがわかる。そして、行為の物語は、動機の語彙という因果関係の範例的要素ストックを共有知識として保持しながら、物語としてそのなかの一つの語彙を採用する。物語の連鎖のヴァリエーションという形で連辞的關係を貯蔵していると言える。

例えば、アメリカの社会言語学者ウィリアム・ラボフらは、都市の黒人の話し言葉を分析し、語りを①要約、②方向づけ (指示)、③紛糾 (展開)、④評価、⑤解決 (結果)、⑥終結部の連鎖という要素連続として捉えた (③⑤以外の要素は任意とされる) (Labov and Waletzky, 1967; Labov, 1972)。これは定型化した物語であり、連辞的ストックの一つを提供している。

物語の研究は、アリストテレスの『詩学』に始まるとみなされるが、現代における研究はトマシェフスキーをはじめとする1920年代のロシア・フォルマリスト、なかでもヴラディミール・プロップの研究(Προπη, 1928)を始祖としていると考えられる。プロップは、アフアナシエフが編纂した『ロシア民話集』中の100編の魔法物語を対象として、物語を「機能(プロットのパタン)」と「登場人物の行動領域」へと分解し、普遍的・恒常的な機能としては、「別離」「禁止」「違反」などの31機能を、行動領域として捉えられた登場人物の類型としては「敵対者」「贈与者」「主人公」など7つを抽出した。こうしてプロップは、物語が諸機能の連鎖として構成されているとしたのである。注意しなければならないのは、プロップが分析した民話集において、範列的ストックとは、7つの「登場人物の行動領域」なのではない。7つの行動領域は、それぞれ具体的な登場人物名として範例的ストックを有しているということなのだ。他方、連辞的関係として31機能のストックがあるということでもない。31は3!通りの並び替え(現実には不可能な順番も含む)、あるいは当該の物語に含まれない機能もあるため、物語に含まれる機能のパタンとしては最大で $2^{31}-1$ (一つか二つの機能だけで物語が成り立つかどうかは問題であるが)の機能の組み合わせの可能性(連辞的ストック)を有していることになる。

プロップの議論は、フランスにおいてさらなる発展を遂げた。その代表的なものを挙げるとすればまず、プロップの言う機能の連鎖は固定的なものではなく、三つの契機(潜在性・現実化・結果)における二者択一によって展開するとしたクロード・ブレモンの議論である(Bremond, 1973)。また、先に言及したアンドレ・グレマスは、同じくプロップの行為者を、欲望・伝達・闘争という三つの関係と、物語中の行為者レベルを設定することにより精緻化した(Greimas, 1966)。グレマスはさらに、物語の継起を、措定された内容/倒置された内容、否定/肯定という二つの選択肢の組によって構造化し、「意味の四辺形」を構成することで物語分析を可能にした。物語を物語平面においてだけでなく、語りの空間のなかで定式化したのがジェラルド・ジュネットである。ジュネットは、物語中の出来事の時間的前後関係に注目して、「語られる物語内容」と「語る物語」とのねじれを類型化した(Genette, 1973)。ロラン・バルトは、物語論にさまざまな提案を行っており、物語の核または枢軸機能に対して、副次的要素または触媒機能を区別、さらにさまざまな指標が用いられることを論じている(Barthes, 1966)⁹⁾。

本稿は、これら物語論の成果を、行為論に結びつけて論じるための予備作業となることを目的とするものだった。ウェーバー行為論の主観的に思念された意味の客観的性格は、こうした動機の語彙論によってその共有知識としての性格が示され、同時に範例的ストックという観点が開かれた。さらに、そこからは連辞的ストックの可能性も導き出され、両者を保持するものとして物語というモデルが示された。物語論は、行為の動機の抽象的な構造の分析を可能にしてくれる可能性を示すのである。

おわりに

こうして動機の語彙論は、発展のその先を物語論に託すことが構想されたとはいえ、依然として残る問題はある。まず、動機の語彙が共有知識として社会的にストックされているとはいえ、その貯蔵内容はどのように更新されるのか、ある動機の語彙が行為の理由として用いられなくなったり、新たな語彙が加わったりするときに一定の法則性は見出せるのであろうか。

次に、物語は常に成立するのかどうかという問題である。起こった出来事が理解の枠を超えるとすることは想像できないことではない。1990年代の少年犯罪の際に見られたように、起こった後の一定期間には動機の語彙が見当たらないということが起きる。こうした場合、それは非物語となり、行われた行動はしばらく非行為として宙を漂うことになるのであろうか。

いずれにしても物語論は、行為論の領域に転用可能な豊富な概念装置を保有している。今後、このような可能性について吟味していく必要があるだろう。

注

- 1) 人名の表記については、著作がドイツ語であるかどうかにかかわらず（ドイツやオーストリアでの出版かどうかにかかわらず）、「ヴェーバー」や「アルフレート・シュッツ」のようなドイツ語の発音表記をせず、慣用に従い「ウエーバー」「アルフレッド・シュッツ」とする。また、シュッツの引用文内における表記も「ウエーバー」に置き換えている。
- 2) 他にバーガー&ルックマン『現実の社会的構成』が挙げられる。ブルーマーの行為論は、ウエーバーを直接継承しているのではなくミードを、アレグサンダーやミュンヒの行為理論はパーソンズを経ているし、ギデンズの理論も相互作用論やエスノメソドロジーなどを経由したものである。
- 3) ウエーバー行為論における了解概念の思想史的背景を述べた著作は多数あるが、最近の著作として佐藤（2019）を参照。
- 4) 本稿は、岩波文庫版のマックス・ヴェーバー『社会学の根本概念』（清水幾太郎訳）から引用するが、語句によっては別の訳文の方が適切と思われることもある。その場合は、特に訳本の書誌情報を示さず、文中に訳語を示すことがある。あるいは現在定着している用語を「理念型」のように〔 〕に入れ引用文中に挿入している。
- 5) ウエーバーの行為論とミルズの動機の語彙論との関係は、西川（1991）が詳しく検討している。
- 6) 動機の語彙の理論は、20世紀末日本の少年犯罪の動機をめぐる社会的了解に極めて適合的であった。鈴木（2013）を参照。
- 7) ソシュールの『一般言語学講義』（Saussure, 1972）に始まる「ソシュールの」伝統と、そのテキストクリティックに基づく「ソシュール自身の」思想との峻別は、前者が長い歴史と広い影響力を有しているがゆえに非常に困難で専門的な問題を含むが、ここでは「連辞的」と「範例的」の概念使用に止まるので、後者の議論には立ち入らず、伝統的な理論的体系に則り用語を用いることにする。
- 8) ミルズの語彙論がその後どのような発展をみせたかについては、井上（1997：28-31）に詳しい。スコットとライマンがまず動機の語彙に二つの類型を設定し、その後、会話分析の研究者らによってエスノメソドロジーの「アカウンツ（説明）実践」をはじめとする概念との接合が行われるなどして、「モーティヴ・トーク」論として展開していくことが述べられている。しかし、井上はその規範主義的性格を「窮屈」とも述べて、動機の語彙に物語としての性格を見ようとしている。本稿の立場も井上の見解と同じである。
- 9) これ以外の事例についてはAdam（1984）、Martinez und Scheffel（1999）を参照。

文献

- Adam, Jean-Michel (1984) *Le récit*, Presses Universitaires de France. (=2004, 末松壽・佐藤正年訳『物語論 プロックからエーコまで』白水社 [文庫クセジュ].)
- Barthes, Roland (1966) "Introduction à l'analyse structurale des récits", *Communication*, 8. (=1979, 花輪光訳「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』みすず書房, 所収, 1-54.)
- Bremond, Claude (1973) *Logique du récit*, Seuil.
- Genette, G. (1972) *Figures III*, Seuil. (=1985, 花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール』書肆風の薔薇；=1987,

- 花輪光監訳、天野利彦・矢橋透訳『フィギュールⅢ』書肆風の薔薇。）
- Gerth, Hans H. & C. Wright Mills (1946) *From Max Weber: Essays in Sociology*, Oxford University Press. (= 1967, 山口和男・犬伏宣宏『マックス・ウェーバー』ミネルヴァ書房。[原著 'Introduction: The Man and His Work' の訳])
- Gerth, Hans H. & C. Wright Mills (1953) *Character and Social Structure: The Psychology of Social Institutions*, Harcourt. (= 1970, 古城利明・杉森創吉訳『性格と社会構造 社会制度の心理学』青木書店。)
- Greimas, A. J. (1966) *Semantique structural*, Larousse. (= 1988, 田島宏・鳥居正文訳『構造意味論』紀伊國屋書店。)
- 井上俊 (1997) 「動機と物語」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学 1 現代社会の社会学』岩波書店, 所収, 29-46.
- Labov, William (1972) *Language in the Inner City: Studies in Black English Vernacular*, University of Pennsylvania Press.
- Labov, William and Waletzky, J. (1967) "Narrative Analysis: Oral Versions of Personal Experience", in J. Helm ed., *Essays on the Verbal and Visual Arts*, University of Washington Press.
- Martinez, Matias und Michael Scheffel (1999) *Einführung in die Erzähltheorie*, C. H. Beck. (= 2006, 林捷・末長豊・生野芳徳訳『物語の森へ 物語理論入門』法政大学出版局。)
- Mills, C. Wright (1964) *Sociology and Pragmatism: The Higher Learning in America*, Paine-Whitman Publishers.
- Mills, C. Wright (1963) "Situated Actions and Vocabularies of Motive", I. L. Horowitz ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 439-68. (= 1971, 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 344-55。)
- 西川珠代 (1991) 「社会学における「動機」概念の変容」『ソシオロジ』111号, 社会学研究会, 63-79.
- Parsons, Talcott (1937) *The Structure of Social Action*, McGraw-Hill. (= 1974~76, 稲上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造』1~5, 木鐸社。)
- Пропп, Владимир Яковлевич (1928) *Морфология Сказки*, Academia. (= 1987, 北岡誠司・福田美智代訳『昔話の形態学』水声社。)
- 佐藤俊樹 (2019) 『社会科学と因果分析 ウェーバーの方法論から知の現在へ』岩波書店。
- Saussure, Ferdinand de (1972) *Cours de linguistique générale*, édition critique préparée par Tullio de Mauro, Payot. (= 1972, 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店。)
- Schutz, Alfred (1962) *Collected Papers 1. The Problem of Social Reality*, Maurice Natanson ed., Martinus Nijhoff. (= 1985, 渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻 社会的現実の問題 [II]』マルジュ社。)
- Schütz, Alfred (1932 = 1960) *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt. Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Springer. (= 1992, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成—ウェーバー社会学の現象学的分析—』木鐸社。)
- 鈴木智之 (2013) 『「心の闇」と動機の語彙 犯罪報道の一九九〇年代』青弓社。
- Weber, Max (1922) *Soziologische Grundbegriffe*, in *Wirtschaft und Gesellschaft*, J. C. B. Mohr. (= 1972, 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店 (岩波文庫)。)